

蠅の女王

齋藤

蠅の女王

まただ。不快な羽音が耳をかすめる。連日続く猛暑のせい、最近やたら蠅が増えた。

部屋は男の独り暮らしにしては小奇麗にしているつもりだ。溜まったゴミはすぐに捨てるし、洗い物も放置していない。なのに、なぜ――

じっとりと粘っこい汗が床に落ちる。

すかさず、そこに飛んでくる例の薄汚い虫。踏み潰そうとしたが、すんでのところかわされた。

その夜は、いつも以上に寝付けなかった。

寝そうになると、あの不快な羽音が耳をかすめる。それに加え、生きながら腐っていくような蒸し暑さ。たまらずベッドから飛び起きて、台所に向かった。蛇口から直に口をつけ、夢中で水を貪る。

その時、奇妙な違和感を覚え、とっさに口の中のものを吐き出した。小さな白い粒。米粒かと思ったが、違った。そいつは薄暗いシンクの中で、ぐねぐねもがいていた。

すぐさま便所に駆け込み、飲んだばかりの水をすべて吐いた。

蠅共が沸いてから三週間たった。

喰いかけて放置したままのコンビニ弁当を、横たわりながら眺める。

米だった部分がすべて黒い。丸めたティッシュを投げつけたら、ブウンという音を立てて無数の蠅が散った。

地元就職すればよかった。そうすれば実家に逃げることが出来たのに。ああ、そもそも実家から逃げたんだっけ。親から逃げて、ガキが出来たっていう女から逃げて、逃げて、逃げて、ああそうだ。

俺は作業着のポケットから段ボール裁断用のカッターを取り出した。そして、その刃先を自分の喉仏につきつけた。

壁一面に張り付いた蠅共が、無機質な赤い目で俺を見ていた。

マチコは男の死を知ると、急いでアパートに駆けつけた。

鍵を開け、中に入ると、部屋は濃密な悪臭で満ちていた。

無数の蠅。散乱したゴミ。そして、首がパッキリ開いた最愛の人。

突如、その傷口から黒いものが飛び出し、マチコの耳をかすめる。

生まれたての羽音に恍惚の表情を浮かべ、彼女は言った。

「そう、私がママよ」

腐って肘までになったマチコの腕から、白い粒が床に落ちた。